S-3

言葉にするということ・言葉にならないということ
－基礎心理学と人間性心理学の交差Ⅴ－

企　画　者：宮田 周平[1)]
話題提供者：藤木 大介[2)]、上田 紋佳[3)]、久羽 康[4)]、榎本 光邦[5)]、宮田 周平[1)]
1)鎌倉女子大学 児童学部 子ども心理学科、2)広島大学 大学院 人間社会科学研究科、3)北里大学 一般教育部、4)駒澤大学 文学部 心理学科、5)群馬パース大学 教養共通教育部

keyword：言語、人間性心理学、交差

【はじめに】心理療法は多くの場合言葉を通したやりとりによって進んでいく。芸術療法など言葉以外を媒介とした療法を含めても心理療法で言葉にすることは重要なテーマと言える。一方で、言葉にならないことが心理療法のプロセスで大きな意味を持つこともある。また、臨床場面では心理療法だけでなく、知能検査などでも言葉を使って回答を求めることがある。一方で、言語は基礎心理学の代表的な分野の一つであり、言語の表出や伝達、コミュニケーションは認知心理学や発達心理学とも関連が深い。今回、人間性心理学を中心としたセラピストの立場、言語や認知を中心とした基礎心理学の立場の両面から「言葉」について考えていく。発表者や参加者にとって人間性心理学や心理療法、言葉への新たな理解のきっかけになれば幸いである。

【話題提供】

1. 句や文の産出―メッセージを言語化する過程―
（藤木 大介）

心内に生じた伝達意図（の一部）がどのようにして言語化されるのかについて、言語産出に関する認知的なモデルの概説をする。

2.「読むこと」に関するモデルからみた心理療法と言葉の関係について　（上田 紋佳）

心理療法におけるコミュニケーションについて、理解の側面から「読むこと」や言語発達に関するモデルを概説しながら、心理療法と言葉の関係について考察を行う。

3. 行為としての言葉、認識の言葉　（久羽 康）

心理療法において言葉は、情報内容の伝達としてだけでなく、ある種の行為として発せられることがある。心理療法における言語化を、行為と認識という言葉の2つのモードという観点から検討したい。

4. 知能検査における言葉による回答について
（榎本 光邦）

知能検査における被検者の言葉による回答について、言葉にできたこと・言葉にならなかったことから被検者についてどう見立てるかについて、話題提供を行いたい。

5. 心理療法で言葉にならないことを言葉にしようとするとき・言葉にしようとしないとき
（宮田 周平）

心理療法では言葉にならないことを言葉にしようとすることでプロセスが進んでいくことがある。一方で言葉にならないことは無理に言葉にしようとしないことが必要なときもある。その両面について検討していきたい。